



## 育児支援を考える～番外編1

こんにちは院長の大橋です。「育児支援」を掲げて助産院を開設し5年になります。志は高いけど現実には経済的・体力的・精神的にしんどい事の方が多く正直、「独りよがり」なのではないかと迷走することも有ります。そんなある日、一人の女性と出会い命を守るお手伝いをさせて頂く機会が有り年末年始というシビアな期間に関わりました。その方から手記を頂きましたので皆さんと共有したいと思います。

<手記: その1ー分娩まで>

石原 明子

2018年12月に45歳で出産した水俣在住の石原明子です。18歳からずっと子供がほしく、やっと子どもを持ってもいいというパートナーがあらわれたのは43歳のとき。さんさん助産院には、44歳で最初に妊娠したときに、水俣市社協の方が連れて行ってくれました。結局その子は、はっきりとした心拍が見えることはなくお空に昇ってしまいました。そのときに、助産院の「妊娠しただけで素晴らしい、出産できただけでよく頑張った、育児をしただけで立派」という言葉に本当に救われ励まされたのを覚えています。

45歳で再度、自然に授かりました。熊本日赤病院に行っていました。やれることは何でもやりたいと思い、さんさん助産院をたずねました。どこで産むか、どう妊娠期をすごすかについて、大橋先生の助言は、かなり現実的だったと思います。「大病院は自然なお産ができないからだめだ。助産院で」などという言葉も一般にはよく聞かれますが、大橋先生は「日赤でいい。あなたの年齢では、無事に産めることが何より大事。血圧高めね。今すぐ血圧計買って家で測って。血圧があがったり、目がちかちかしたらすぐ病院にいきなさい」

結局、私の妊娠期は、年齢から考えると極めて順調で、体重も増えず、子どもの胎内での成長も順調でした。順調で日赤の医師も「日赤で産まなくても、もっと産みたい病院で産んでもいいんだよ」と最後はいうくらいでした。そして病院を、もっと「自然な」お産ができる産院に移ろうかと思っていた矢先の36週のある日、大橋先生に言われて買った血圧計の針が150をさすようになりました。「あれ？ちょっと高め？でもいつも高いから大丈夫だろう」。そう思いつつ日赤に報告したら、即入院を勧められ、「あれよあれよ」という間に入院となりました。結局、妊娠高血圧症で、37週で、陣痛促進剤による誘発分娩2日間を経て、緊急帝王切開で出産しました。

お世話になった日赤の医師に「妊娠高血圧を見つけてくださってありがとうございました」といったら、「あなたが自分で測っていて自分でつけたんでしょ？」と。

そっか。元をたどれば、私と子どものいのちを助けてくれたのは、大橋先生が半年前に言った「血圧計買って帰いなさい」の一言だったのかもしれない。

次号へつづく・・・